

同志社生活協同組合

理事長 青木 真美 先生

他者との繋がりを

同志社生協の理事長である青木先生にインタビューをお願いした。最近インタビューが楽しくなってきた。青木先生はちゃきちゃきの江戸っ子であり、聞かれたことは返事が早いし、テンポがいいし、しかも要点をおさえている。公共交通の社会性には教わることが多かった。教職員の参加や他大学の交流など今後の大学生協の活躍に期待したいと思う。

名和 先生がお生まれになったところからお伺いします。

青木 生まれは東京の赤坂です。昔の日大三高の裏手、今で言うTBSのある赤坂サカスの近くになりますが3歳までそこで育ちました。そのころ父は父の長兄と一緒にホテル経営をしていて、かつてのGHQの近く、アメリカ大使館も近くにありました。父が英語を使えたので外国人向けの小さなホテルを経営していたわけです。そのころでいうとモダンな生活をしていたといえます。



3歳のころには神田末広町に引っ越しました。地下鉄銀座線の神田と上野の間です。そこは母の実家のあるところで、父が食べ物屋をやりたいかったのでビルの一角に洋食店を開き、そこでハンバーグなどを出していました。

名和 当時としてはしゃれたお店を経営されていたのですね。

青木 そうですね。昭和30年代のころでした。母方の家は仕立てワイシャツや和装小物をやっていました。そういう土地柄ですのでお店には歌舞伎や落語の関係の方が買い物においででした。

そのころ母方の祖父が日本郷土玩具の会にかかわっていて、犬張子などを集めていましたが亡くなったあと処分してしまいました。私自身が生まれたときにもらった犬張子は今でも持っています。

名和 ご両親はどちらも東京の人だったのですね。いわゆる江戸っ子ということですか。

青木 親戚がみんなそうした下町で商売していたものですから、一戸建ての家に住んだことがないんです。家族も親戚もみんなお店の二階に住んでいましたね。

名和 そうすると先生はものづくりに携わる「職人」の血筋を引き継いでおられるのでし

ようか。

青木 そうですね。わたしはものづくりが好きで小さい頃から何かしら裁縫をしていました。高校生の頃には自分でワンピースをつくったりしたこともありました。

名和 先生は高校時代までずっと東京にお住まいだった？

青木 小学校から同志社に来るまで東京でした。幼稚園の先生がわたしの親に東京学芸大付属への進学を勧められて、一番近い小学校に通いました。付属の小学校と中学校はそれぞれ4校あってそれまではエスカレーターでしたが、高校は1校のみ、定員は全体の1/3だったので、がんばって高校進学を果たしました。

神輿（みこし）をかつぐ

名和 青春時代のエピソードあるいは思い出はございますか。

青木 一番の記憶でいうとやはり小学校3、4年の頃東京オリンピックがあつて、校庭からジェット機が大空に五輪を描くのを見たことを覚えていています。また当時の日本が強かった体操競技を見に行った記憶があります。

このままいけば人生で2回、東京オリンピックを間近に見ることになります。もっとも2020年に生きていければの話ですが。(笑)

名和 先生は「古い東京」と、オリンピック以降の「新しい東京」の両方をご存じだと思いますが、その違いは如何でしょう。

青木 古い東京ということでは当初、家の前を都電の路面電車が走っていましたが、それがなくなったというのがいちばん大きいですね。それ以降地下鉄の時代に移っていきました。我が家のあった地域は1945年の東京大空襲で焼け、戦後広い道路ができていたので、その後の区画整理はありませんでした。

近所に秋葉原や青果市場がありました。神田祭の地元でしたし、大学生の頃、三社祭、深川祭のときは、つてをつかって神輿（みこし）をかついだ思い出があります。

名和 先生は江戸っ子を地でいっておられたのですね。大学はどちらに進まれましたか？

青木 大学は早稲田大学に進学しました。

名和 早稲田に進学されたのはなぜですか？

青木 大学で経済学を学びたいと思っていました。当時はマルクス経済学か近代経済学か、という時代で、漠然とした思いしかありませんでした。それで早稲田、慶応、東大を受験し、慶応と早稲田に合格しましたが、慶応出身の父からは『慶応に行け』といわれたものの結局早稲田に進学しました。でもわたしの性格からいって早稲田大学に行ってよかったと思いました。なぜなら当時の学生もブランドものを身につけたり化粧が派手だったりというスタイルで、わたしにとって慶応大学は肌が合わなかったということです。

名和 祭りに参加されたり、江戸っ子らしい生活を過ごされて、大学生活での印象はいか

がでしたか？

青木 そのころ大学紛争の影響がまだ残っていて早稲田でもセクト同士の対立があったり、学費値上げ反対運動などの影響で学期末試験がなくなりレポート提出に切り替えられたりしたこともありました。部活について高校では水泳部にいましたが、大学では「ドイツ語研究会」に入りました。なぜなら高校半ばころから英語が苦手という意識があって、大学では他の語学を学びたいと思っていたからです。大学では同じ部室にドイツ語研究会とフランス語研究会があってとても仲良しでした。早稲田の付属高校では第二外国語制度があって、早稲田学院出身の学生にすごくドイツ語が得意な人がたくさんいました。わたしは在学中、アイセック（AIESEC）という経済系学生の交換留学制度に参加しましたが、2か月間ドイツのゲーテ・インスティテュートで語学を勉強したあとアイセックのプログラムに4ヶ月参加し、3ヶ月くらい鉄道に乗ってヨーロッパをバックパックで回りました。そこで感じたのは、ヨーロッパの街の規模が暮らしやすく住みやすいということでした。

名和 就職はどうされたのですか？

就職氷河期のなかで

青木 就職についてはまず経済系のシンクタンクを探していました。当時、国鉄の外郭団体の運輸調査局がドイツ語の翻訳ができる人材をさがしていてそこに合格しました。運輸調査局は、当時はあまり知られていない存在でした。当時は女子大生の就職氷河期のまっただなかで、就職協定で4年生の10月1日からいいということで、携帯も



インターネットもない時代だったのでとにかく電話をかけてアポイントをとっていました。そうしたなか周りの学生が有名な会社に内定していきました。運輸調査局への就職について親自体は『いいんじゃないの』といていました。心配はしていなかったし、そこでいいならと快く送り出してくれました。

名和 ご兄弟はおられますか？

青木 二人姉弟なんですが4つ下の弟は今、京大の基礎物理研究所に在籍しています。

名和 ご姉弟で学者揃いなんですね。

青木 わたしの親戚はみんな商売をしていますので親戚では研究者はおろかサラリーマンも珍しいです。

当時の国鉄時代から国立市に鉄道総合研究所というよく知られた研究所があり、リニアモーターカーの開発や鉄道車両の台車の揺れや信号設備など技術に関することをしていましたが、わたしがに入った運輸調査局は交通政策をやる場所でした。国有鉄

道なので国会で議論され答弁をしなくてはならないし、そのために調査機関が必要だったわけです。そのころ国鉄ではまだ貨物輸送が中心で、たとえば天王寺から新大阪につながる路線や武蔵野線、京葉線などは最初、貨物輸送路線として計画されていました。その後貨物輸送が衰退するなかで旅客輸送に転用していくことになりました。大きな組織なので、縦割りの弊害や方向転換することが難しい状況を目の当たりにして大変勉強になりました。

ドイツには都市交通の運輸連合組織があってバス、地下鉄、電車を一体化して1枚の切符で乗れるような仕組みがありましたが、それを研究して運輸調査局が発行していた交通経済系の研究月刊誌「運輸と経済」誌にも掲載されました。メインで研究していたひとつは都市交通政策でしたが、もうひとつは高速鉄道政策をやっていました。

欧州の公共交通に学ぶ

名和 ドイツと日本を比較して何がいちばん面白かったですか？

青木 鉄道や公共交通が、社会に必要なインフラの一部であるという考え方がドイツにはあります。日本では民間企業にやらせて採算がとれればいい、という考え方ですが、先進国でそういう考え方をとっているのは日本だけです。

ヨーロッパでは国や地方公共団体が政策に責任を持ち、「自動車がないと生活できない」という地域にしてはいけないという考えをもっているわけです。ヨーロッパではたとえばロンドン、パリ、ベルリンの間で地域間競争、都市間競争があり、都市の魅力を競っているなかでいつでも安い価格で交通機関が利用できるということを大事にしています。

名和 中国の留学生などは、日本では交通機関が発達していてどこでも気軽に行けると感嘆しています。中国ではどこかで列車が止まると、その影響で、離れているところにもいつ動くのかわからないということがあたりまえですから。

青木 ヨーロッパでは日本よりもっとすすんでいる状況にあります。日本でも富山の「ライトレール」(低床路面電車)の富山港線の終点の岩瀬浜駅は向かい側にバス停があって乗り継ぎがすごく便利です。もっと有名なのがフライブルクですがDB(ドイツ連邦国鉄)の駅の上に路面電車の駅があって、エスカレーターに乗ればすぐに路面電車に乗り換えられ利便性に優れています。クルマのドアツードアの利便性に対抗して乗り換えの利便性が必要だという考え方です。

名和 ヨーロッパにくらべて日本は立ち遅れているということでしょうか？



「交通権」と貧困問題

青木 日本でも交通政策基本法が新たに成立しましたが、教育基本法と同じで交通政策の分野で初めて国、都道府県市町村がどういう責任を持っているかを明らかにした法律です。われわれは「交通権」という考え方を重視しており、適切な価格でだれでも移動できる権利を持つということは社会的人権のひとつとであるという考え方です。どうしてかという、1950年代にアメリカのロスアンゼルスで暴動があり、その大きな理由は当時の黒人たちが、クルマを持ってない、バス代も高いというなかで、職を探すのにも高いバス代が必要であり、バスにも乗れない貧しい人がますます貧しくなるという現実があったわけです。

名和 交通の不備も貧困の一因であるということですね。

青木 日本でも同じで、車がないと生活できない環境があります。一部でコミュニティバスを地域で運営しているところもありますが、ヨーロッパではそうしたものに国や都道府県市町村が補助しています。なるべく安くやってもらうために、われわれは「マイナスの競争入札」といっているんですが、補助金が安くて済む事業者を見つけるとい入札の仕方を考えています。

名和 大学生協は鳥取との交流がありよく行きますが、あるとき智頭急行を使わないで在来線で京都まで帰ろうと考え、鳥取から津山に出てそこから姫新線に乗り換えれば簡単だろうと考え実行したところ、のりかえダイヤがずたずたで驚いたことがありました。この地域の人たちはどうしているんだろうかと思いました。車がなければ病院にも買い物にも学校にも行けないということになります。

青木 かつては郊外の広々としたところに住んで便利にマイカー通勤しましょう、と言われていました。クルマが運転できなくなれば生活できなくなるということが高齢化現象で浮き彫りになってきました。結局、公共交通を便利にしましょうというだけでなく、どこに住むかの都市計画をきっちり確立する必要があります。

京都市は「歩くまち京都」という政策を打ち出して、たとえば京都駅八条口を公共交通を使えるような駅前広場にしようとか、四条通りの片側2車線を1車線にして歩道を広げてバスに乗りやすくしようとか、烏丸・河原町・御池・四条を囲む地域の細街路をすべて一方通行にするというような課題が検討されています。

名和 先生はすでに京都の交通政策にかかわってきておられるのですね。

ふれあいを活かして

青木 京都には軌道系の交通機関が地下鉄、阪急、京阪、叡山電車などたくさんありますが、それらが総合的に活用されていない、それらをばらばらに使うと高くなってしまいます。それらを1枚の切符で安く便利に使えるようできればいいと思います。ヨー



ロッパと比較して日本はクルマに甘すぎるのではないのでしょうか。生協としても今後環境問題を重視して取り組んでいければと思います。たとえばクルマを使う場合、ひとりで通勤するのは不経済です。家族旅行でみんなが乗っていくのはいいんですが。そういう場合はもっと公共交通機関を使えばいいと思います。

もうひとつの考え方として、公共交通機関を使うことによって知らず知らずのうちに他人とふれあうことで社会性が身につくということがあります。同じ空間にちがう人間がいるという認識を共有してそこでマナーや振る舞いを身につけることにつながっています。通勤や買い物でクルマばかりに乗っていると結局、自宅の延長でしかありませんし、他者と触れ合う機会が失われてしまいます。

名和 そうした現代の交通体系が無縁社会を生む一因となっているのでしょうか？

青木 社会的にはそういえると思います。また社会性ということに関しては大学生協の課題とも重なりあっているのではないのでしょうか。助け合いやお互いのことを考えながら生活していくことや、よりよい生活をめざしていくことが求められています。

名和 その意味で先生が大学生協の役員としてかかわっておられるということがよく分かります。先生は環境の課題についてどのように考えておられますか？

青木 日本では70年代半ばから省エネの課題が叫ばれてきましたが、現在では工場など産業の分野では節電やエコがずいぶん進展してきています。一方家庭や業務上での省エネやエコはすすんでいません。最近我が家で10年使った冷蔵庫を買い換えたんですが、その結果なんと1ヶ月の電気使用量が千円ほど安くなりました。冷蔵庫やエアコンなど温度にかかわる製品の熱効率が飛躍的によくなってきているといわれています。『まだ使えるからもったいない』ということが必ずしもいえなくなってきています。

名和 家庭のなかでの環境課題をしっかりとらえることが必要なわけですね。

青木 京都の小学校でもエコ家計簿が教材として使われていたりして、子どもたちが環境課題を考える社会になりつつあると思います。家庭のなかでも、毎日どれくらい電気を使っているかを可視化していくことも大事だと思います。また先ほどから言っています公共交通機関の活用などにもつなげていくことが必要です。いずれにせよ個人個人の意識や工夫が環境問題の解決のカギを握っていると思います。そうしたことを生協としてもしっかりおさえて活動していければと思います。

名和 先生は昨年から同志社生協にかかわっておられますが、そのなかで大学生協の良い面と悪い面について、感じておられることがあればお話し下さい。

青木 この間、生協の正規・パート職員の皆さんがさまざまな努力を重ねてきた結果もあり、同志社生協の長年の赤字体質を変えてきたということが大きいと思います。たしかに学生支援課からコンビニの品揃えが不十分とお叱りもいただきましたが全体として前進していると思います。良心館のスペースを有効に使って混雑を緩和することもしてきました。また生協が取り扱う学生総合共済や保険の加入について、学生委員が窓口で説明してくれていました。学生委員会の活動も前進していますが、学生理事も理事会で一生懸命質問したり、全般的に活性化してきていると思います。ただ教職員の方々の生協にたいする意識問題でいうと十分とはいえず、今後も理事だけでなく多くの教職員にいろんな活動に参加してもらいたいと思っています。ところで同志社生協と教職員組合との関係はどうなっているのでしょうか？



教職員の参加意識

名和 かつて教職員組合が大学との話し合いのなかで、コンビニの導入を要望したことがあり、その時わたしは組合の執行部に『それは困る』と申し上げたことがありました。本来生協と教職員組合の構成員はほとんど重なっている筈なのにそのようなことがあり『お互いもっと協力できるはずなのに』との思いを持ったことがありました。

青木 私自身、教職員組合連合の委員長をしたこともあり、組織横断的で学部や部署を超えていろいろなことが見えたことを実感しました。そのなかでもっと生協との協力関係ができたのではないかと思います。

名和 教職員の皆さんは大学生協を自分たちの組織とっていない面があるようですね。逆に大学生協の側もそうした教職員への働きかけが弱かったと思います。

青木 今後の方向性として教職員組合員の参加意識を高めたいですし、また教職員組合との協力関係づくりも進めたいですね。

名和 生協と組合とは課題で重なる部分が少なくありませんし、今後いっしょにやっていく努力をすべきですね。

青木 教職員の意識の問題ですが、たとえば会社組織であればお互い協力してやっていかなければなりません。大学の場合は一人ひとりの先生が個別に行動するというパターンが多いですね。それでも学内で共同生活をしているわけですし、学部運営においてもお互い協力すべき状況があります。その意味でわたしは「教員の社会性」というものを促進すべきだと思っています。

名和 京都大学の池上惇先生が、かねがね『教員は研究と大学行政と組合の3本の柱で活躍してほしい』とおっしゃっていたことを思い出しました。ところで青木先生は長年東京でお住まいだったわけですが東京と京都で違いを感じられることはありますか？

愛猫に言いきかせる

青木 そうですね。わたしは時々着物を着ることがありますが、和服の色合いが違うと感じることがあります。京都では茶道を嗜む方が多いことによるものかもしれませんが、薄いクリームやピンク、薄黄緑などパステルカラーの着物を召される方が多いと思います。東京は濃い目のはっきりした色が多いでしょうか。ニュアンスとして江戸紫は青が強い、京紫は赤みが強いといえますね。

それから「京のぶぶ漬」ではないですが、営業マンの方からお聞きした話で、京都では新人教育の際、『訪問先でお茶を出されても1回目は手を出してはいけない、2回目、3回目の訪問で何度も勧められてはじめていただくんだ』ということは今でも言っているそうです。

名和 「千年の都」としての京都らしさの特徴でもあるのでしょうか。一種の文化と言えるかもしれませんね。

青木 わたしは自宅で飼っていた2匹の雌ネコに、『京都では女の子が「元気がよろしおすね」といわれたら決してほめられたのではなく「うるさい」ということなんだよ』と良く言いかせていました。(笑) 逆に、お付き合い以外の場では意外と京都の人ははっきりものをおっしゃると思いました。

名和 私の母親は京都出身でしたので先生のおっしゃられたことはよくわかります。また前任校の鹿児島でもその地方特有の文化を実感した覚えがあります。最後に、先生が今後大学生協に期待される課題について伺います。

青木 京大生協の今山稲子さんとも話していたんですが、今後もっと他の生協の人たち同士つながりを広げていくことが大事だと思っています。1月におこなわれた「シカ害」学習企画にも参加させていただき、また9月に福島大学で開催される全国教職員セミナーにも参加する予定ですが、そこでの交流を楽しみにしています。これからも同志社生協や京滋・奈良の大学生協が積極的に外部との交流をはかっていってほしいと願っています。

名和 今日は交通政策のお話から地域文化論までさまざまな話題をお聞かせいただき、ありがとうございました。

(7月25日 同志社大学至誠館ラウンジにて)

(注) アイセック (AIESEC) はオランダ・ロッテルダムに本部をおき、世界の124の国と地域に10万人以上の会員を有する国際的な特定非営利組織。正式名称はフランス語で「国際経済商学学生協会」といい、平和で、人々の可能性が最大限発揮される社会の実現をめざし、海外インターンシップ事業をはじめとした活動をおこなっている。日本にはアイセック・ジャパンがある。